

教師の 腕前診断

文 | 城ヶ崎滋雄 (千葉県船橋市立夏見台小学校)
イラスト | 吉田朋子

今回のテーマ

「がんばる力」を育てるステップ

前は「我慢する力」について紹介しました。今回は「がんばる力」について考えてみます。「がんばる＝やりたくないことをやる」と定義すると、「そうか！ やりたくないのか」と子どもの憂鬱さを察することができ、どうしたらやりたくないのかを考えるようになります。逆上がりの練習を例にお話しましょう。

1 まずは環境づくり

体育の時間に鉄棒運動で逆上がりを行いました。できない子どもには「逆上がり練習器を使って練習の仕方を教えます。」

授業が終わり、「逆上がりができない人は休み時間に練習しよう」と声をかけたのですが、はたして、他の遊びをしています。

逆上がりの練習は、マメができた、腕が痛くなったりと辛さがつきまといまいます。また、できない姿を友達に見られるのは恥ずかしいものです。そのため、子どもたちは自主的に鉄棒の前に立とうとしません。

まずは1週目の課題です。

Q1

逆上がりの練習に消極的な子どもに対して、どんな言葉をかけますか。

- ① 継続は力なり。毎日続けて練習すれば必ずできるよつになるから、がんばれ。
- ② あと〇人で全員ができるよつになるから、がんばれ。
- ③ とにかく、業間休みだけは外に行って、鉄棒に触ろう。

①のように、子どもの心情に訴えても、響かないでしょう。子どもは、できること・好きなことなら言われなくてもやります。

子どもは、やり続けなければならないこととはわかってはいます。しかし現実には、できないことや辛さが伴うことはやろうとはしません。逆上がりよりもドッジボールや鬼ごっこが楽しいので、鉄棒には見向きもしないでしょう。

②のように友達と比較され、その悔しさをバネに練習に励む子どもは稀です。大方の子どもは、「どうせ自分なんか」といじけるだけです。

できないのに練習をしないということは、逆上がりができることに意味を感じていない、できないことが恥ずかしいと思っていないからです。

練習のきっかけ作りとしては、③がいいでしょう。外に行くだけなら簡単です。しかも、鉄棒に触るだけなら苦手な練習をしなくて済みます。「練習をしなさい」とも言われないので、逆上がりの練習の布石だと気づきません。休み時間から戻って来た子どもは自分から先生に「逆上がりの練習をしたよ」と報告します。

「鉄棒に触れる」という課題には、鉄棒の前を通ることを意識付けるという意味が含まれています。常に鉄棒を目にしていると、それが当たり前になり、鉄棒への抵抗感がなくなります。大事なことは、教師が望む環境に子どもを馴染ませることです。

2 それならできるといって「小さい」課題

2週目の課題です。いよいよ練習を視野に入

れた課題を提示します。

Q2

どんな課題を提示しますか。

- ① 練習時間を設定する。
- ② 練習する回数を設定する。
- ③ 子どもに任せる。

③のように、できない子どもに任せてもやりません。

任せられるということは、時間や練習内容を自分で考えられるということです。それは、できる子ども、今の自分をさらに高めたいという向上心がある子どもの発想です。

①も良い方法でしょう。しかし、時計を見ながら練習するのは煩瑣です。

やりたくないのにやらされるわけですから、練習をせずに鉄棒に触っているだけになる可能性もあります。そうすると、時間が過ぎるのを待つだけでも課題に取り組んだことになりません。

そう考えると、②がいいでしょう。時間に関係なく、指定された回数だけを練習すれば終わりになります。

ただし、いきなり多くを望んではいけません。できないからこそ、「それならやれる!」「その程度の回数でいいの?」という安心感のある回数にします。例えば「3回連続して回る。これを3セット」という課題にします。たったの3セットです。これなら子どもは気楽に取り組めます。

できない子どもにはハードルの低い課題を提示します。そうすれば、練習をやったとい

教師の腕前が試される、学級経営のひと工夫。

ベテラン先生によるケーススタディです。

こんな時、あなたならどうしますか？

う達成感を味わえます。

成長・進歩を実感できるようにになると練習への意欲が高まります。それは、「このまま続ければできるようになるかもしれない」と期待感をもてるからです。そして、できるようになった誇らしい自分を想像できます。

その結果、練習をやるうと思うようになるのです。小さな達成感ですが、今まで避けていたことをやっている、できているという満足感は大です。意欲はできることで芽生えるのです。

3 仲間がいるからがんばれる

さあ、いよいよ3週目です。1日3セットの練習ですが、身体が逆上がりの動きに慣れてくるので、進歩を感じるようになります。そうすると、「もう少しでできる」という期待感をもてるようになります。

Q3 どんな練習をしますか。

- ①回数を10セットに増やす。
- ②友達を誘って練習する。
- ③先生が練習に付き合う。

①のように、回数をこなせばできるようになるという先生の心情はわかりますが、子どもは、「もっとやるのか」とうんざりした気分になります。人は強いられると反発したくなります。自発的にやるうとしないと、やり続けることができません。

③も、子どもにとっては励みになるでしょ

う。できるようになると、「先生、見て見て」とアピールします。

ただ、子どもは子どもの中で成長します。そう考えると、②がベストです。

人は、一人でがんばっているうとくじけそうになります。そんな時、励ましてくれたり、アドバイスをしてくれたりする仲間がいると、がんばり続けられます。

がんばっている友達が目の前にいると、思わず応援したくなります。できるようになると我が事のように喜んでくれます。ドイツの詩人、シラーは「友情は喜びを2倍にし、悲しみを半分にする」と言いました。友達の存在は、逆上がりができた喜びを共有し、練習の辛さを軽減します。

友達の快挙はクラス中が知ることになり、できない子どもは、「やれば自分もできるかも」と効用感もちます。それはクラス全体に波及します。

できる環境を作つてやれば、苦手なことも「当たり前」のように思えます。課題をスムーズステップで提示されると、「それならできるかも」と気が楽になります。仲間の支援を受けることで見守られているという「安心感」を得られます。この3つがそろえば、がんばれるようになります。

ただ、こんな事がありました。ようやく逆上がりができた子どもに、「おめでとう」と声をかけると、「もう練習をやらなくてもいいよね」と安堵の表情を浮かべられたことがあります。歓喜の笑みを浮かべると思っていた私

にとつてはショックな一言でした。

大事なことは、逆上がりができるようになることではありません。「がんばればできる。だから、他にも挑戦したい」という前向きな気持ちにさせることです。自己効用感をもたせることです。

それが、自己肯定感につながり、がんばることが自分のためになると信じ、ストレスを跳ね返す心・折れない心・めげない心を作ります。レジリエンスは「我慢する力」と「がんばる力」によって培われます。

